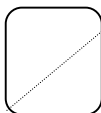


ごんぎつね ③

名前



「ごんぎつね」を読みながら、問題に答えましょう。

兵十が、赤い井戸のところまで、麦をといでいました。

兵十は今まで、おっ母と二人きりで、貧しいくらしをしていたもので、おっ母が死んでしまつては、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」

こちらの物置の後から見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向うへいきかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしのやすうりだあい。いきのいいいわしだあい」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていきました。と、弥助のおかみさんが、裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。いわし売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもつてはいました。ごんはそのすきまに、かごの中から、五、六びきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向つてかけもどりました。途中の坂の上でふりかえつて見ますと、兵十がまだ、井戸のところまで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

つぎの日には、ごんは山で栗をどっさりひろつて、それをかかえて、兵十の家へいきました。裏口からのぞいて見ますと、兵十は、午飯をたべかけて、茶椀

をもったまま、ぼんやりと考えこんでいました。へんなことには兵十の頬ぺたに、かすり傷がついています。どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「一たいだれが、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、盗人ぬすびとと思われる、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこうおもいながら、そつと物置の方へまわってその入口に、栗をおいてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもって来てやりました。そのつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもっていきました。

問題

なぜ兵十の頬ぺたにかすり傷がついていたのでしょうか。その理由がわかる文を文章から書きぬきましよう。